第五百廿二號目次

◎社　説

大名學問
團十郎と芝翫
嗚呼圓朝子
事業演劇同一の辨

◎隨　感

子供の手紙（一）文かく道

◎女　學

胎　育
名古屋をんな論……………青柳有美
料理道…………………………生間正起

◎光瀾之觀

記　録………………………新井奥邃

◎雜　録

モツァルトの臨終…………赤司嚼花
水かゞみ……………………左琴女
手紙のうつし………………八王子隱士

◎時　事

○支那人の喧嘩○大學大學○相撲何故に人氣ある乎○常陸山○外國傳道會社○其雇はれ人○獨立は如何

第五百廿一號（八月十日）目次

◎社説　時大小觀（催眠、容易く行はる◎醫術甚だ効なし◎華族居邸の煉瓦塀◎待合風茶室◎復活に非ず新生なり◎讀書人及び事務家◎音樂會と教會堂◎離間流言横行す◎支那人の外國保險會社◎經營談、成功談）

◎隨感　松の化粧◎秋天の痴雲◎戀ひしき蟲よ◎月よ、月よ◎月の恥かしさよ◎秋のれがひ◎活動の薔薇◎紅顏の美少年◎鳥部山の煙、あだし野の露

◎女學　女學生の不女才
昆虫學と家庭…………名和靖
料理道…………………生間正起

◎光瀾之觀　記　録……新井奥邃
泉叢園林の側面觀……某

◎雜録　舍監の四ヶ月（二）……青柳有美
花子のなげき（完）……中島湘煙
宇宙と人生及靈魂……黒岩周六
自然と人工……………左琴女

第五百二十號（八月廿五日）目次

◎社説　文相論、生活難

◎隨感　棄る者は享け、死する者は生く◎我、蠻勇の賤見なる哉◎萬古の尚友◎科學者の孤獨◎尊とき科學者◎何んぞ無雜作なる◎夏の朝た夕べ

◎女學　繼母の地位（二）夏の料理（生間正起）我薔薇園（森兒逸人）

◎光瀾之觀　記録（新井奥邃）

◎雜録　日本の古代彫刻（青柳有美）花子のなげき（故中島湘煙女史）巖の蔭（大塚楠緒）ゲーテとカーライル（新渡戸稻造君）

◎時事　◎天候佳良◎動物虐待防止會◎英學熱◎演説會◎名古屋の女學◎江戸城明渡◎婦人の外部運動◎柳澤女史歸朝◎渡米倶樂部

期日	前金	廣告料	送金
毎月二回（十日、二十五日發行）	壹冊定價 拾錢 半年分前金 壹圓拾錢 一年分同 貳圓 代金は惣して前金にて御注文ありたし◎年來引續購讀の諸君にて前金切れ候共御斷無之間は引續き發送するとも可有之事但し其節は惣て一冊十錢の割にて計算し追て請求可致事是れ眞に不本意乍ら計算の煩はしき不得止左樣仕候間かねて御承知置被下度候	一行（十七字詰）一回　前金拾錢 一段　同　三圓半 一頁（三段）同　九圓	送金は東京巣鴨郵便支局に宛て小爲替にせられたし◎郵便切手にて送らるゝ人は惣べて一割増にて計算せられたし

大賣捌
東京　東京堂
西京　勉強堂
大阪　文潤堂

明治三十六年十月十日印刷
明治三十六年十月十日發行

發行兼編輯人　巖本善治
印刷人　布川孫市
東京府北豐島郡巣鴨村字庚申塚二百四十六番地
發行所　女學雜誌社
（特電番町千一番）
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
印刷所　株式會社秀英舍
（新橋電話十八番）

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

第五百貳拾貳號

明治三十六年十月十日發行

社説

大名學問

今の學問は、其の學び方の形式的たるのみならず、其の學科も亦た形式的なり。何故に斯る學科を撰ぶぞと問へば、西洋の學校に於て之を存する故と答ふるもの尠なからず。然れば君は西洋に移住して西洋人とならんとする乎と問へば、彼は啞然として反つて我を狂へりと笑ふ。

よし又幾分道理ある答辯を爲すものにても、偏へに理想的の大目的を望みて、脚下の實用を忘却し、聖人となるか、女王となるかに必要なる學科を主として、一個の男たり女たるに欠く可らざる目前の智識を與へず。所云ゆる「大名學問」の弊に流るゝもの多し。

斯く言はば、飯を食ひ衣物を着るに効力ある學科を勸告するかと思はれんが、左にあらず。吾黨の所見によれば、今日の如き躰裁にて立身出世の早道を敎ゆるは、詐僞窃盗を敎ゆるに似て。衣食は躰よりも劣り、立身は立德よりも下なり。單に食ふヿ、着るヿを主として說かんは、吾黨の堪うる所にあらず。

左らば、何に平ならずして、今の學科に不足言ふや、と問はば、聖代聰慧の教育論者多くあるにも係はらず、眞に奇異なる大忘却を呈して毫も顧慮せざる不可思議の故にあり、と答へん。

今試みに、其の數種を擧ん歟、

(一)水泳

世界には、陸よりも水多し。特に、日本は島國にして、水を經ざれば、海外の交際は行はる可らず。島内、川多く、米は田に生じ、溝潔疏水、十方に横流せり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

然るに、水泳を能くするもの幾人ありや。

假令ひ三里五里の長流を泳ぎ、洪波を亂り、大濤を突切る程の手練は無くとも、水に入りて暫しだに生存する丈の心得はなかるべからず。一間に足らぬ小河に陷いりても、直ちに往生せねばならぬ程のたわけあり、甚だしきは、町の錢湯にすら溺死するものあり。不愍と言はんよりも寧ろ滑稽と云はざる可らず。

人幼にして歩むヿを敎へらる。之に同じく泳ぐヿを敎へらるべき道理にあらずや。人は、地の上に歩めども、水に陷いるヿも多くあり。此の一科を普通敎育の中に加へざるは、寧ろ暗愚と云つべし。

(一)躰　操

方今、躰操なきにあらず、然れども、甲乙二樣に欠乏せり。躰操を心術に同化せしめざる、甲の欠點なり。躰操を武的に修練せしめざる、乙の欠點なり。

夫れ、車の疾走するに衝突して之を避け得ず。大木の倒るゝに出合はせて之を去り得ず。ミス〳〵眼中に映じ乍ら、躰竦み、足縮みて如何んとも爲がたきが如きは、武的躰操の不足なる故也。

蓋し、人世變化多し、車より落るヿあり、二階より顚倒するヿあり、突當るヿあり、打るゝヿあり。假令ひ門外に十人の敵なくとも、天下には無數の伏魔あり、其の避け得べき丈を避くるは、即はち人間の心得なるに、人一向に覺悟せず。晝あつて夜なく、大道あつて徑なく、萬物一定に固着して、毫末の變化なき樣なる大名仕掛の御殿にのみ生息せしめんとす、寧ろ痴にあらずや。

人は、今少しく、自個の躰を自個の思ふ樣に操つり得る修業を爲ざる可らず。

(二)文章及演說

思ふ所を述べ盡し、思ふ所を書き盡す、文章演說は寧ろ五官に匹敵すべき官能なり。而して、此の官能を開發するヿを普通敎育中の必須學科とせざるは、何故ぞ。

美文美辭は美術の類なり。たとひ美術に堪能なるほどには至らすとも、實用に不足なき文章と演說とには練達せざる可ら

ず。之を欠くは、一種の啞にひとし。

(四)人相術

天に晴雨の顯はるる如く、貌に邪正の左別を見めす。所云ゆる觀相の術なるものは、決して根據なき空論にはあらざる也或は耳目鼻口の位置、或は線紋斑點の出沒を比較し、數百年間、數百千人の集合寫眞を分析して、一種の科學的歸納を立す。當らずと雖ども遠からざる推斷を得るは、固より其の數にあらずや。而して、此術に於ける一と通りの智識を有するとも亦た普通學科中の隨一となすべき筈なり。

但し、今の文明世界に於て此の説を爲すを聞かば、甚だしく奇異に感ぜざるものは蓋し稀なるべし、而も、親しく其の術に研究したるとあらざる門外漢の一概なる輕蔑は、寧ろ採るに足らず。自から知らざるものは、之を是非するの價値なければ也。

然れ共、我國古今に於ける幾多の傑士が潜心工夫したる所にして、而して人生の大事に屢ば應用し利益したる此の觀相術なるものにして、若し眞に其用を成すとせば、此れ實に人間世に處するに至大至重の羅針盤ならずや。論者須からく一考して可なるべし。

(五)事務の才

今の學校出身者に、事務の才を欠くの甚はだしき殆んど豫想外に出づ、眞に是れ「大名學問」の絶頂なり。彼等が、事務上の設計、周密、機敏、秩序等に熟せざるは言ふを待たず、此等を以て俗なりとするの偏僻久しく去らず、亦是れ封建の余弊なり。

既に事務の才絶無なり、其の學何等の用を爲すとなし、事々皆な機宜を失し、歩々衝突を招く。憫れむべし、學校大名は獨歩獨行するの智識を全然欠如せる也。

團十郎と芝翫

團洲逝けり、梨園の異芳を散じたり。

彼の發達は、正しき道を履みたり。彼の修養は、適切の宜しきを得たり。彼は當然なる苦心を積めり。而して稀有なる成

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

功を、稀有なる好機會に乘じ得たり。

彼は早熟早成の質にはあらざりき、初めは寧ろ漠たる遲鈍家の如く見えたりき。而も是れ苦心修養の道に於て、晩成大熟の方針を擇みたる所以にして、久しく花々しき喝采を得ず、而して後に秀拔せる老練を取り得たる正則の歩みにてはありし也。

彼が尤とも苦心したる所は、技の神に入りて、自から忘れ、舞臺に出でて、演劇たることを思はざるに到達せる修養にあり故に彼は、尤とも輕き所ろを平々抹し去り、尤とも重き所ろに自然に泣き、意至り感來る、大抵、觀客あることを忘れたるの狀あり。是れ大舞臺唯一人、巨眼、千百の客を壓し得て、餘息あらしめざりし所以の秘義なり。

余が彼を見たる最後は、春日と家康となりき。春日は寧ろ適せず、適せざるにもあらざりしが、惜しい哉、相方を欠きたり。老家康は是れ先天的の適役、獨歩壇場に技を擅ひまゝにして毫も遺憾なかりき。其の役柄として、相方を欠くの憾みもなかりき。

之に先だちて、淸正を觀たり。淸正の如き勇威を表に顯現すべき人格には少こしく不適當なるに係らず、菊五の遺子を念思する餘情を含んで之に加味し、馬上杜鵑を聞いて老の近づくを感慨する眞情に合せ、意外なる感動を見客の心に惹き起させたり。

之より以前の盛遠、重太郎の如きは、寧ろ言ふに忍びず。

嗚呼、彼は殆んど爲すべき惣てを爲し、又、病後再生の舞臺に於ても、毫も遺憾なく、而も幾分老熟を增したる異采を放つて、一の隕星の墜るが如く死せり。天下誰か愛惜せざるもののあらん。

梨園の落花落葉相踵ぎ、寂寥比すべきなし、誰か將來、團洲を追ふべきものぞ、夫れ、菊五は舊江戸の名殘なり、復たび之を產出せんこと難し。團洲は新日本の魁にして、恐らく之より子弟あらん。其の摸型を倣はんとするもの寧ろ甚はだ多からんとするに係らず、渠の如き人格を以て、彼の如き修養を積んとするものなきが故に、遂に之に企及するものを絕つ。稍や之に類せんとすることに力め、其の抱負多くして而も多少成功したるは芝翫なる歟、彼れ一面、大根役者の資質を存し他の一面、群を拔くの天品を潜む。稍や、團洲初期の當年に

似たり。方今、誰か、左團の痼忠と、松助の老實と、片市のをかしみと、女寅の突込とに及ぶ者あらん。當該の一面に於て、寧ろ劇壇の逸品なり、而も團洲的大成の希望に於て、尤も多く、尤とも廣く、尤とも氣高く、尤とも末長く、倣ひ近づくべき適役としては、遂に芝翫を推さゞるを得ず。彼、亦た幾分の野心ある歟、近年、連りに男裝し、櫻痴居士の如き寧ろ之に投合して、彼に女の如く又男の如くならしむ、女俠の役を與ふる即はち是の意義也。

余も亦た初めは、彼の上品なる姿勢と、貞潔を發表する天眞とに歡こび見るの外、左したる囑望はあらざりき。而も、彼が團洲の重太郎に配したる忠臣講釋の演劇を見たる頃より、大いに一轉化を認めて、少なからず囑望し、其の抱負と自信との日を追ふて增加するを見、些さか祝するものあり。芝翫たるもの、其の修養を本式にし、其苦心を重厚し、敢て輕々しき急進と競はずして、次第と天品を開展しつゝ進まば、將來の團洲たらんとするも、必らずしも格外の野望にあらざるべし。夫れ、芝翫の能く之に及ぶべきや否やは、彼の爲に言はず。凡そ劇の美を念ずるものは、之より以後久しく團洲を欠かんと、寧ろ堪へがたきに非ずや。

嗚呼圓朝子

劇壇に團洲を失ふとを歎ずると同とに、端なく、かの圓朝子を憶起す。

惟ふに、技の大なるものより觀じ來らば、圓朝子は寧ろ團洲にも優りたりき。

蓋し團洲の成熟は、七分の修養より成れり、而も殘三分は其の天眞にして、天眞を天子のまゝに特表して異采を放てり、此れ團洲に團十郎役なるものゝ存する所以なり。

圓朝の成功は、十分の修養と、其以上の天品より成れり。彼固より天品を存す、故に其の特色なきにあらずと雖ども、彼は其の特色を發揮するよりも、より多く修養工夫を發揮したり、故に彼は其の演ずる所に於て可ならざるなかりき。彼は同所同演に於て、貞女ともなり得たり、忠僕ともなり得たり老臣ともなり得たり、田婦野人ともなり得たり、子供とも、老婆とも、丁稚とも、番頭とも、文明人とも、仙人ともなり

得たり、や丶難きは英雄豪傑なりしが、之も亦た一と通りは演じ得たり。則はち、彼の同情と、彼の同化とは、團洲よりも廣く且つ大なりき。

夫れ、今の劇壇二三子の逸品は、たゞ其性格の發表に過ぎず故に其の適役なるもの大抵一人只一種に過ぎざる也。之れ安くんぞ技の大となすとを得んや。團洲の如きすら、尚ほ免がれず、況んや其他をや。

嗚呼、圓朝子逝て後ち、圓遊あり、圓喬あり、圓馬あり、門下彬々たる所以のもの、圓朝の大によれり。團洲門下寧ろ企好せずと云ふべし。凡そ、後の技を修むるもの、亦た此邊に戒心する所なかる可らざる也。

事業演劇同一の辨

誰か人生を以て演伎にあらずとする。天上、物見人あり、而前、看客あり、吾一々技を演ずるにあらずや。事業を以て眞面目とし、演技を以て假面目とす、すべての誤解は、此の誤解より由來す。

もし俳優、落語者と雖ども、其の演ずる所を以て一大事業とし、其事業に上りて壇に立つ時、假にあらず眞なりとするの意氣あらずんば、天何を以て之に成功を許さんや。

彼の政客、論士、すべての事業家と雖ども、其爲す所は、人間假りに一役を演ずるに過ぎずと觀じ、因緣によつて役を定められ、塲に上つて戰むんに技を演ずるとを自覺する超脫なかりせば、天何を以て、此の執着自利の奴隸に成功を許さんや。

故に、今の藝人の藝に成功せざるは、藝に眞面目ならざるが爲にして、今の士人の事業に成功せざるは、事業に道樂なく遊心なきが爲め也。藝人は、輕んじ過たり、士人は重んじ過たり。過たるも、及ばざるも、凝るも、戲むるのも、皆な問ふに誤まれり。

嗚呼、人間の爲す事に、何の異同あらん、其の執る職分に何の高下あらん。藝妓も、俳優も、宣敎師も、敎育者も、もし能く其職分に忠實にして、而して執着せず、事業に熱心にして而して拘泥せず、其の執る所に修養し、其の獲る所に陷溺せず、其の人格は極めて擴張して、其の所役はたゞ一時の用

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

に辨じ、綽々餘裕ありて而して何事にも可ならざるなきに至り、やゝ偉大と云ふべき乎。方今の評論、何んぞ人を小さくするの甚だしきや、是れ帝國を大ならしむる所以に非ず。

隨　感

○幼兒の書信

幼なき人の書く文は、いと些細なる事計り心づく故、反つて實情歴々とした、大人の書信にまさるものなり。最と親しき間柄にても、手紙となればあらたまり、拜啓謹言と敬しみて用事ばかり嚴そかに書く我國の書き風ゆゑ、大人の書信こそ取わけて甲斐なきものである。幼兒は之と異なり、誰が居らしつて何を下され、何處に行て何を食べ、猫が鼠をとつて、ひよつこが何疋生れ、犬が何んなに遊んで、何をしたと云ふぞなど、彼等に取りての一大事なれば、いと眞面目に而して極めて無邪氣に此等の事を認むる手紙こそ、寧ろ反つて實狀を表現し、客路遠征の旅人をして、極めて濃密なる想像を惹き起さしむるを得るなれ。わが旅するうちは、子供等三人日に〱書信を寄するの定めなるが、近頃、二週あまり外にありける時、送り越せしものは、取わけ余をして此の感を強くせしめたり。九才の末女が文には、

○父上樣ごぶぢにをつきになりましたか今日ひよつこが四羽でました早く歸つて來てみてごらんなさい今日兄上樣とうんどうに行升た此頃は蚊が大へんいてこまり升名古屋は蚊がいませんか又暑くて御病氣にをなりなさらないようにをかいりなさいひよつこの箱にかやをはつてやりました今日猫をかはいがつて〱をり升をばさまが土用ぼしをなさいましたほんとに大へんでしたよ昨日をばさまがはなをかつてくださいましたからさつそくねいやにすゑさせました
さよなら

○父上樣御端書をどうもありがとう端書拜見いたしましたきつとをかえりが早くなるのだろうと思つたらそうではなくつてをそくなるのときゝましたから大へんをどろきました猫はやかましくて〱こまつてをりますよ猫の暑いのは三日しかないのですそうでそれですからふるえて居ます

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

○父上様今日はかんこうばにまいりました歸りに氷水をのみましたお家の景色はよろしいですね名古屋は景色がやうございますか家は涼しくてわた入がきたいようです黒はあいかはらずしつぽをふりてまいります今日は莊ちやんがさはいだから御手紙がよくかけませぬ猫わまいにちごはんや水を食べております猫はものをきの中でニャー〳〵グウー〳〵となかないときわありませんひよつこはピヨ〳〵なく鳥はコケコウ〳〵と鳴きますさよなら

○父上樣御手紙を有難御座升父上様の手紙を見て莊ちやんが大へんをこつてをります父上様のを顔わまだわすれません鬚があるしまいげのよこにきづがあります父上様が帽子をかぶりましたのもまだ顔にちら〳〵します私の靴は父上樣のを歸りになつてからてよふございます今日ひよつこをかごの中にだしました御用があつていやでしよう父上樣がを歸りになりましたら靴をかつてもらつてはかまをはき靴穿ち朝がほを見にゆくのですよきめましたよウレシイナ、ツレシタヽカイカチヌ、少兄さんはぶう〳〵いつて御手紙をかいてをりますよさよなら

○父上樣私わ毎日〳〵御手紙をあげ升から書ことがありません今日は寒くはをりを着ましたきのう叔母樣が民子のはをりをぬつて下さいましたから今日かはこうしきに着てまいりました二百十日はあれるかと思ひましたらあれませんでしたからよその人わいヽといつていらつしやい升父上樣がいらつしやらないとなれとしまいいらつしやらないものとおもつてをり升からさむしくつてこまりますよそれですけれどそうをもうといやですよ父上樣わさぞ御用があつていそがしいでしやう學校のせいとさんわもうお歸りになりましたさよなら

○父上樣此頃わ雨がふつて運動が出來ませんからいやです此寒いのに伊勢わ水をあびて居ます聴きましたら旦那樣のまねをして居升といヽました父上樣さぞをいそがしいでしやう民子は一度も御手紙をやすみません今日わぎうにくを食べました大そうをいしう御座いました父上樣に上たくおもいましたごちそうさまひよつこわ一つにしぬけになりましたからいそうにあるけません、ヲヤスミナサイ、ヲサキ

エ

○朝は姉さんも兄さんも學校に往つてしまいなさるから獨りぼつきで淋しくつていやですよ早く父上樣といつしよに御膳が食べタイと父上樣に御手紙を上るのわこれつきり

――コレツキリ――さよなら

十三才の姉の方は、少々文章めかす故、反つて音信の足らざる所ろあり、中に、

○ひよつ子は日に／＼大きく相なりピヨ／＼さへづる樣のいと／＼愛らしく候また大きなるひよつ子はもはやコケツコーときのこえをつくるほどに相成候また畠のとうもろこしはもはやよきほどに熟し候父上のお歸が二三日なくばさぞかし甘味ならめこの畫はねえやが民ちやんのこしまきをかぶりきものをぬひをる所を私か手紙をかきつゝ寫したるにて候西洋グードバイ京都おかへりやす田舍アバヨ東京さようなら手紙的あら／＼かしこ

○鳴海しぼりは細きかすりがよからめと存じ候白うりは早くかほが見たし毎日／＼父上のおかへりと一處にまち居候ひよつ子は四匹にてなか／＼丈夫にて候垣をつくれと仰せられしが程よき籠が候ひしより一つに皆をし込め候親どりはそばへゆくと羽をひろげて怒り候巣鴨の萩は今がさかりにて來客あるごとに嘆賞せられ面白をほどこし候實學園より貰ひし猫は……氏方の白猫が產みたるとの事なるがニヤア／＼夜中もやかましきほどにておかげで鼠のかげも見えず候畑のとうもろこしは誰かよその人がむしりとりたるものと見え八ツほど無くなり候送らるゝれば送りたけれどツハ甚しき不經濟なりと聞きて思ひ止まり候莊ちやんは父上のお歸りをそきときゝて只今よりブー／＼怒りをり今日の手紙を荒々しくかくこそよけれと云ふも誠にをかしく候私の理想歌、ハンモクにゆられ／＼てひるねかな、打水や庭の下駄までぬれてをり　月みれば千々にさゞやく虫の聲

月よりも花火がいゝと民子さん

○庭のはぎ今散りかゝらんとす云ふ速に歸校せられよと萩とまた父上の歸校をまつが如く頭をうなだれ手もてさしまねくまた夕がほ朝がほも毎朝競ひがほにて美しさ云はん方なしまたひよつ子は日に／＼生育しもはや米も麥も平氣にて食べピヨ／＼もすこしブヨ／＼になり候

○白うり送て下さるよしモシ腐たらば如何しませうチ胸中

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

心配とよろこびてグチヤ〳〵となりました朝貌はすこし老たりと雖も是に次ぐは夕顔にて人の年齢にたとふれば今や二八のつぼみまた萩はモウ花もさめて父上の御歸り迄には如何かと思はれ候これもまた九日ぐらいです毎日〳〵水まきいたる庭は始終水です昨今は暈がへて大へんまた今日は井戸がへですよ荘ちやん只今露の字を忘れ私にきゝましたよ學校へ入學した支那人と川井先生と生徒さんとて讃美歌を歌てをられますみんなにこんなよをきくそうです貴君之室如處平、來他友使汝樂

○來朝の支那人はいろ〳〵面白きとなど云ひあひ誠に活潑に候明治女學校と云ふをメージージヨーガアコー、子ヅミをメヅミ、巖本をヒワモートなどをかしき節すくなからず候不破氏が一生懸命にて敎えられたることばは、さよならありがとう、よろしう、せんせい、など

○今日午後二時半頃梨瓜到着致しました呉々も御禮申上升早速先生達皆様へのこる方なく配りましたら皆々様大よろこびでした又其中の不満足なを臺所に遣せしに市平おたけおなべの面々殊に大喜びにて其甘味をたとへて曰くヲリヤア今迄にあんなうめへ瓜を食べたよはねえぜおめへも食べたとはあんめいゝたと云つて居つたを聞ひても其評判のよろしきを察するに足るべく只今配當の方々の御姓名をならべ立つべく候………各二づゝそれから長太と車屋、私供は晩の御飯後いやになる程たべましたよ然し御藥をのみましたから御心配はあるべからず

一〇

而して十二才の男兒が書く所ろは全然趣を異にせり、亦一興にあらずや、たゞ一書をあぐ、

此頃無暗にお父様のお顔が見たく成ました各古屋の金の鯱よりもお父様の方が見度ですよ、今晩月が大變いゝので兎の歳なる僕卯と杵を持てお月様の處へ飛で行たく成ました鳥ならば飛んで行たし西の空、冷水に腹くらくなる暑さ哉ハンモクの上にいねむる夏休み、

父様は風をお引なさつたさうでお手紙を見て驚きましたお父様はもう直にお歸りに成事と思つて居たものですから少〳〵當が無くなりましたが何少しの事故辛捧しましやう姉様や民ちやんが荘ちやんは怒つて居ると手紙に書ましたが夫はちがひます僕は中々怒つたりすねたりしませんから御安

心下さいそれから靴の事は叔母様と御相談いたしましたが僕は海水浴の代りだと思ひますから少し上等の靴にしたひのですが叔母様は余り上等で無い方がいゝと仰やい升が𪜈どう致しませうか𪜈兎に角僕はどつちでもよろしう御座い升（しかし成丈上等、まず夫が快なるかなきまれば僕と兄様と行まして買ますから上等でも中等でも下等でもお手紙でお知らせ下さいまし、内閣總理大臣兼海軍大臣兼海軍大將大勳位侯爵巖本莊治。

○文の誠意

「忘れねばこそ思ひ出さず候かしく」「候べくと存じ候べく候」など、小ざかしく、悧巧げに、且つ躰裁ぶりて認ためたる是迄の書き風は、所詮、表をかざり、儀式に合はするとを旨としたれば、喩うるに猶ほ病氣届の如し。眞情の流露せざる亦宜べならずや。西國の文學者は、善き文例を得んとせば、郵便局に行けよと言へり、眞摯のよく名文を爲すに例へて也。此意義に於ては、今の兒童の揮毫が大抵大人にまさる如く、文も亦た成人に劣らざるとあり。誠の要見るべき也。

女學

胎教

◎生物の尤とも下等なるものは、母種が割れると直ちに獨立の生物となる。やゝ進歩すれば、卵子を生み、此の卵子が孵化して第二の生物となるが、更に高等となるに及んで、胎内に抱いて其の卵子を育てるに至るものである。而して、この胎内に抱くの時間は、生物の高等となるに随がつて彌よ長くなるもので、人間十ヶ月の長きが如きは、殆んど他に類例のなきものである。

◎何故、遂に胎内に懷くに至り、而も其時期彌よ長くなるに至るもの乎。之を進化の理神に問ふときは、必らずや所云あるとを發見するであらふ。即はち高等の生物ほど、親の世話になるべき時期が長くして、其の半睡半醒の如き最初の養育時代に、懇篤なる感化を母親より十分に受入たいと云ふ必要から起こつたものと見える。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

◎支那の列女傳に云く、古者婦人子を姙めば、寢るに側せず坐るに邊せず、立に蹕せず、目に邪色を視ず、耳に淫聲を聞かず、夜は瞽をして詩を誦し正事を道はしむ、如斯すれば則はち生るゝ子、形容端正にして才、人に過ぐと。文王の后、武王周公などの母は、特に此の胎教に力められたものであつた。

◎尤とも、母が胎內にある其子を敎ゆると云ふ事は、甚はだ道理あるらしくは聞えるが、生物學上にはちと變に思はるゝ所もある。然し、子が母の胎內に在る時は、宛がら母の一身に續がれたる五躰の一の如きもので、五躰は一身の氣によつて影響せられ、全身は、心の樣によつて感化せらるゝとを思ふに於ては、母が胎內に其子を懷ける時、其身及び心の上よりして之に影響感化を與ふるとの多きは、當然の事と思はれる。

◎元來、心を用ひて躰を制するとの出來るは、疑ひなき事實て、強烈なる精神の作用によりては、遂に死すべき病死をも防ぎ止めたる塲合幾らもあるとてある。昔しネルソンは戰かひの最中、丸に中られて既に死せるにも係はらず、尙ほ瞑目

せずして戰捷の報を聞けり。又、スクロフラと云へる不思議なる病あり、王之に手を觸るれば直ちに癒ゆ。王の威光によりて此病を治療せしゆゑ、一名キングス、イビルとも號けたり。かの美にして姣よきマリエ、アントイネツテの髮毛が暫時にして白くなり、又千字文の作者、一夜にして白髮になりたるなど、皆な精神が肉躰の上に及ぼす影響である。斯の如く、精神すでに肉躰の上に大影響を及ぼすとせば、母の精神氣質は、其の肉躰の一部分とも云ふべき胎內の子の上に影響せざるの理があらうか。

◎紐育のプロフヘツサー、ハンモンドが曰く、其の都の或る妻懷胎三ケ月の時、良人或る夜面てに傷して流血淋漓たる慘まじき形にて歸り來りしかば、妻は喫驚して倒れたり、此時余は委賴をうけて診察し、其後も治療したるが、妻は斷えず其の兒に何か無れかしと案じたるに、後ち女兒を産むに至り其間に黑紅色のアザありき、而して其位地、其大きさ、宛然彼の良人が前夜顏に傷したるものと同樣の狀なりしと。又、同所のプロフヘツサー、ダルトン曰く、此の都の醫學校の門番の妻、或夜二つの耳を失ひし人の事を夢み、甚はだ強く之

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

に感動せしが、後に子を産むに至り、其子の耳一端を欠き、恰かも殺ぎたるが如くなりしと。

◎プロフヘッサー、レヰス、スミスの説によれば、手の平なき乞食が物を乞へるを見て、何も與へざりし女が、後日之を助けざりしとを後悔し、深痛し、感動し、遂に手の平なき兒を生みしとあり。又ルイ十四世の后マリエ、セラサは之に仕ふる黒奴の忽に走り出て御服に足を引掛け倒れたるを見てふと驚ろき、其感動激烈にして遂に黒王子を生み、又或る母は時計の事を連りに考へしに、其子の顔の上に、時計の形あり〳〵と現はれたりなど、デマンゲヲン氏は言へり。

◎近年、アザ拔きの神藥を發見せし大石氏の研究によれば、アザは、兒が母の胎内にある時、或る激動を受けたるとに由來すと思はるゝもの尤とも多し。目今、愛知、岐阜兩縣下に一種のアザ甚はだ多くあるが、其子の年齡を算ぞふるに、丁度廿五年大地震の頃に懷胎せられしかと思はるゝものなりと。

◎母と胎兒との關係如斯なるが故に、希臘人は、母の寢室に圓滿美麗なる裸躰畵、裸躰像を置き、朝夕之を見て、胎兒の上に美なる姿勢を得せしめんとしたり。美術家ブラックスマンの母は、氏を生む前數ヶ月、日々彫刻を學び、深く美術上の思想を養ないたり。故に、言へらく、其子の天才は、胎敎に成れりと。

◎さて、胎敎の理合を手近に證明するものは、かの睡眠術である。人、或る程度迄眠りて、半ば覺め、半ば睡りたる狀態に居る時は、傍らより之に命令する通り、如何樣にも從順するものである。よつて、此の催眠術を治療又は敎育に迄て應用する事も出來る。即はち眠らせて置て、其の病氣の苦痛を忘れさする事、又、いろ〳〵の惡習慣などを止めさする事を爲るに、睡眠中は一々命の通りに實行する。覺めれば又元の如くなるにしても、度々此の睡眠中の命令を繰返て、遂に、追々と善習慣を身にのこし來るものである。

◎よつて今ま胎兒の狀態を考ふるに、恰かも催眠中の半睡半醒の在樣に似て居る。此の間十ヶ月、而も初めは眠ると強く後には醒むると多き十ヶ月の長き間、母が不斷、催眠術的敎育を施こして感化すること故、遂に母の心をうけ、母の氣をうけ、母の感ずるやうに感ずるに至るは疑がひなきことであ

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

る。

◎此の理合によつて考がふれば、昔し、日輪懐に入ると夢み、又は、巨人の足跡を踏むなどと妄想したる婦人が、英雄豪傑を生むに至りたるは尤ともの事である。かゝる壮麗偉大の事を平生想像する質の婦人は、懐胎中、其子の氣質の根抵に英資を感染せしめた筈であるのである。

◎經に云く、「我は是れ主の使ひ女なり、爾の言る如く我に應かし」と。この信仰深く、貞操潔よき乙女こそ、クリストを胎内に宿し、其の清き御心の上に汚れざる感化を寄するよを得たるなれ。又、エリサベツは、マリアの話をきゝて心動き、胎兒、腹の内にて躍れるほどに悦こびたり。此の清き婦人二人、三日間同もに住ひ、神の恵を談じ、賛歌をしたひ、一身を天に献げて、胎内の聖き御児を守り養ない、即はち他日、洗禮のヨハ子あり、救主イエスあるを得たり。蓋し、エリサベツとマリアとは、基督教的胎教の理想ならん。

水やそらくゐちもわかぬ北の海に
羽をのす鳥の何あさるらん　　安　芳

名古屋をんな論

附　名古屋經濟學

有美　青　柳　猛

名古屋は輸出專門地なり。内地のみならず又外國への輸出專門地なり。生産を輸出し藝人を輸出し、又遂に美人を輸出す。見よや、名古屋をんなの足跡今や全國至るところにありて、北は北海奥州の極より南は馬關九州の端に及び、東京に於ける藝者女郎總數の三分の二は、實に名古屋をんななりといふに非ずや。又上は市川八百藏片岡市藏市川時藏尾上梅幸など大歌舞伎の俳優より、下は淺草公園に手踊興行を為す扇家美正に至るまで、これ同じく共に名古屋の産なり。名古屋の地に生産多し、穀物あり蔬菜あり、瀬戸物あり漆器あり、各種の製造業あり。而して、これ等のもの又概ね皆な輸出せられて、日本の富を吸收す。然り、日本全地の富は、今や沛然として一名古屋に集中せんとするの觀あり。

あゝ、何を以て然る乎。

名古屋は濃美平原を市場（Market）とする都會なり。恰も一物躰の重量が其重心によりて代表せらるゝ如く、名古屋の濃

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

美平原を代表するものなり。故に名古屋を説かんとするものは、まづ濃美平原を説かざるべからず。濃美平原は沖積層なり、日本に於て最も豐饒たる沖積層なり。是を以て、其耕地として使用せらるゝに足るべき面積の如きも、又全國に冠たるものありて、尾張國の如き實に全面積の五割を耕地と爲し しかも、是等濃美平原一帶の地の生産力たるや實に驚くべく日本人重要の食料品たる米穀を出すこと、平均一方里に付毎壹年七千石以上なりと云ふに非ずや。是れ誠に全國に其比無きところなりとす。米穀にして既に此くの如くなれば、麥其他の穀類に至りても、一方里の產出高同じく全國に冠たるものありて、蔬菜の如き又大に見るべく、『尾張大根』の名は、金の鯱鉾と共に、天下の人口に膾炙せるものあるに非らずや。

かく食料品の供給產額夥しきものありと雖ども、若し其地の人口稠密にして、これが需要の其供給に比例するものあらば、食品の價格到底低廉なるを見るべからざるや素より論なし。されど、幸にして濃美平原の人口は、比較的稀少なり。即ち大阪府が一方里に付五萬一千二百七十二人を有する時に

當り、愛知縣一方里の人口は僅に四千七百五十九人に過ぎずして、實に大阪府の半ばにだも至らざるを見る。是に於てか濃美平原に於ける食品の價格は需要供給の平均を得んとして勢ひ低落せざるを得じ。中に就て米麥諸穀の如きは、之を運搬輸出するを得べしと雖ども、蔬菜類の如き、長く貯藏に堪へざるを以て、市價の低廉殊に著しきものあり。

それ一都會に於ける或る物品の市價は、其有する市場(Market)の需要供給によりて決定せらるゝものなり。既に名古屋の市場たる濃美平原に於て、食料品供給の割合の、これを需要する人口の割合に勝れたるものあらば、名古屋に於ける食料品の價格の、同じく低廉なるものあるべきは、實に理の當然ならずや。而して、食料品の低廉は生活費の低廉を意味し、生活費の低廉は、又生産費の低廉を意味するものたるは、經濟學の敎ゆるところなり。名古屋人は實に安價に生活し、安價に生產す。是に於てか、六頁の新聞にして其價壹ケ月僅に拾八錢を出でず、人力車を乗り廻はすこと一時間にして、なほ七錢を拂へば足れりとす。此くの如くにして、名古屋の勞銀は全國無比の低廉なり。印刷物の如きこれを九州よ

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

り注文して運賃を支拂ふも、なほ且つ其地に於てするより二割方の低廉を見るといふ、又宜ならずや。

かく少額なる生産費を以て生産すること、これ名古屋の特色なるを以て、新らしき生産事業の、期せずして續々名古屋の地に勃興する誠に所以なしとせじ。而して、かくして生産せられたる富は、名古屋人たるもの果して之を如何に所置する乎。浪費徒消せんとする如きは、その能く忍んで尙ほ能はざるところなり。

古き諺に曰く『京の着倒れ大坂の食ひ倒れ堺の建て倒れ』と。盖し、飮食に侈らざるものも衣服に驕奢を極め、衣服に質素なるものも美味に飽かんことを念ひ、衣食を顧みざるものも、時に居住の壯宏を希ふ心あるをいへるなり。これ實に人間の通情なり。されど、名古屋人に至りては、『食はず着ず建てず』にして、その飮食に節するところを以て衣服に驕らんとするにも非ず、又衣食に餘すところを以て住居を作らんとするにも非ずして、徹頭徹尾全然の勤儉なり。即ち自ら食はず着ず建てずして、其生産せるところのものを餘し、しかも、悉く之を擧げて輸出するなり。輸出して而して貨幣を吸

收するなり。玆に至れば、名古屋の富者は稍ゝ他の地方に於けるそれと其趣を異にするものあり、其吸收したる貨幣に依りて土地買收或は銀行預入既設會社の株劵購入等のことをなさずして、これを有望なる新事業に放入し、その資本によりて更に盛なる生産を營むなり。しかして、更に輸出し更に吸收し更に生産し更に輸出し、又更に吸收す。名古屋の日々に新にして又日々に新となり、近時其生産の勃興せること實に著しく、活氣の全市に充滿せるものあり、將に大坂を凌駕せんとする勢あること、決して偶然にあらじ。加ふるに、地は東海道鐵道の中央に當り、東西兩京の間に介在して交通の便又夥し。其將來、實に恐るべきものありといふべし。

また、かくして新生産業の勃興著るしきものあるが故に、産業の進步によりて製造品の如きも、又其價格の低廉なるものあるに至り、愈々益々生活費の低減を見るなり。されど、人或は時に疑ふて問はん『急激なる産業の勃興は、玆に勞働の需要に不足を告げて、勞銀の騰貴を招ぎ、名古屋に於ける生産費を昇さしむる恐れ無きに非ずや』と。答へて曰く、斷じて是れ無し。盖し、名古屋地方の人民が、これまで農業其他

舊來因襲の産業によりて得たる利潤は、甚だ輕少の價格なりしを以て、今茲に少しくこれに勝れる勞銀を支拂ふ新事業起らば、恰も蟻の甘きに就くが如く、附近の勞働者を擧げて悉く其新事業に集まるを以て、勞働の間に自らなる競爭起り、勢ひ此處暫く勞銀の騰貴を見ざるべければなり。

世間又往々低廉なる勞働あり。然れども、其品質（Quality）多くは劣等なるを常とす。假令へば大阪と京都との勞働の如き即ちこれなり、大阪の人力車賃は確に東京のそれに比較して安直なれども、嗚呼そのノロクサクして牛車を驅るが如し思ひあるを如何せん。名古屋の勞働に至りては、勞銀の低廉なるものあれども、其低廉たるや、營養を節して來れる低廉に非ずして、營養の低廉なるに因れる低廉なれば、勞働の品質又决して墮落すること無く、その勞銀の低廉なるに拘はらず、甚だ高等なるものあり。是を以て、今や全國中名古屋の如く、しかく起業地に適せるは無し。其資本の供給敢て少なしといふに非るに、金利の概ね他地方に比して壹年二三釐方上れるものあるは、蓋し、此くの如くにして資本の需要實に凄じきものあればならんか。

世間動もすれば、名古屋人を以て全國無二のヅルキ人種なりと爲す。されど、是れ全くの謬見なり。名古屋人は聰明なるのみ開化せるのみ。かの山陽道のそれがし人種の如く、害惡を以て人を待つものに非ず。たゞ餘まりに産業に熱して、營利に汲々たるが故に、切りに機敏たらんことを欲してヅルク見らるゝに過ぎざるのみ。かの卒直義烈のカルセージュ人すら、そのたゞ商業に精勵する故を以て、羅馬人は之を目して欺騙詐僞これ偏に力むるものなりと爲し、ケトーの如き常に『カルセージュは絶滅せざるべからず』との言を口に絶たず、遂にピユウニック戰爭を招けるにあらずや。産業民族の多少ヅルキ觀あるは實に免れ難きところなりとす。

名古屋は又其生産を輸出する如く藝人と美人とを輸出す。人もし當代に名ある俳優の、多く名古屋の地より出で、又今や全國至るところの花柳社會に盛名ある美人の、概ね名古屋をんなるを聞ひて。其本塲本元なる名古屋に足踏み入れなば藝人の秀でたるもの至るところに其妙技を演じ、千百の美人阿房宮のそれの如くに袖をつらねて雲集しつゝあるべしと爲さむ。蓋し過てりその名古屋に停まりて技藝を公衆に賣りつ

ゝある藝人の如き、實に皆な見又聽くに堪へざるもののみにして、悉くコムマ以下の輩なり。美人の如き又千百の婦人中僅に一二を見るのみ、此くの如きは又名古屋人が輸出主義の結果にして、かの豐富なる生産の間に立ち毅然として食はず着ず建てず、以て自ら奉ずること甚だ薄く、大部分の殘餘を擧げて悉く之を輸出する如く、名古屋人自らは、又藝人の拙劣なるものを以て大に足れりと爲し、美人の美ならざるものを以て獨り慰め、獨り喜び、藝人の秀拔なるものと美人の秀麗なるものとは、悉く之を擧げて輸出し、以て天下の富を吸收す。是れ名古屋藝人と名古屋をんなの名天下に高くして、しかも却て名古屋に名人と美人との在らざる所因なり。

然り而して、名古屋をんなは必ずしも天の成せる麗質あるものに非ずして、古き土蜘蛛種族の血統を享け顏の色多くは淡黒色を帶び、其音色の槪ね澁ぶりにごれるものあると、其江戶前の女の如く喋々たる快辯なくして、辛氣クサキまで寡言なると、偶々時に口を開けば、其言語の如何にも横柄に聽ゆるとは、能く滿天下に愛嬌を賣りて其喝采を買ひ得るものに非ず。されど、其肉ヅキ良く、殊に顏面筋肉の潔く緊縮して惰肉無く、鼻の形狀多くはカッチリと引きしまりて美はしく鼻筋通り、その淺黑き面色と相待ちて皆な共に『聰明』のエキスプレッションを發輝する如きは、宛然歐西の地にありて、其熱情ある青年の血を狂はしむるヂプシーの乙女にも似たらんか。女義太夫竹本小土佐の如き、是れ實に名古屋をんなの標本なり。その天下を擧げて名古屋をんなに頂禮する又所因なしとせじ。名古屋をんなは實に日本のヂプシー・ガールなり。

されと、名古屋をんなの魔力ある所因は、此くの如きヂプシー・ガール的容色に非ずして、實に其化粧と着衣の色模樣を撰擇することの巧みなるにあり。名古屋をんなの如くしかく其身に配合よくして、しかも觀るものゝ注意を喚起し得る眼ぼしき色模樣の衣類を撰むに巧みなるもの天下恐らくは是れあらじ。されば、その弊、又往々にしてこれあり、良家の女にしてなほ且つ花のお江戶の藝者すら、容易に纏ふまじと思はるゝ如き浴衣をさへ羽織るに至る。人もし夏の夕名古屋吳服店頭に飾らるゝところを觀ば、必ずや思ひ半ばに過ぎん。されど、既に一たび男子をして顧らしむるを得、注意を拂は

しむるを得ば、之を操縦する唯一歩のみ。たゞ、一擧手一投足の勞のみ。

而して、かく名古屋をんなが、化粧と色模様の撰擇とに發達するものある所因は、又この地の濃美平原の冲積層を市場とし、生存競争の困難激烈ならず、生産容易にしてしかも豊饒なるが故に、生活力の殘餘多く、これを此種の閑樂に費して、自ら悦び、茲に其研究を重ぬる餘裕あればなり。又名古屋に遊藝の行はるゝこと盛にして、藝人を出すこと多きが如きも全くこれと其理由を同ふするものなり。史家エッグルトン以爲らく、一國文藝の興隆は國家の富を安んずるに至りて始めて起ると。然り、名古屋人は其市場なる濃美平原の冲積層にして豊饒なると、其人口の比較的稀少なるものとによりて、誠に富めるものなり、安んじて衣食し得るものなり。其生活力の大部分を轉じて、これを遊藝に消費せざるべからざる、實に止むなきなり。天下の名ある藝人の續々として名古屋より出づる、豈に偶然ならんや。

料理道

○家庭料理法に就て（二）

生間正起

各地方より聚合せる學生に向つて料理の教授をなすには一地方の嗜好に偏せず自己の法に依らず據るべき所の大法に據り三官共樂の道を教へざるべからず三官とは視官、嗅官、味官をいふなり斯く言へば家庭料理に施すには至難の樣なれども決して然らず例へば、浸物をなすに煠加減を誤らず長短なき樣に裁斷し柚酸を注ぐも熬り加減を誤らざる擂胡麻にて伴へるも其の量に過不及なく器の大小深淺に應じて恰好に盛り之に適當の上置をなせば其の軆裁の美香氣の快、視官、嗅官をして共に樂ましむるに足る之を食ふに調味其の宜きを得ば味官樂んで之を食ひ其の器にあるを盡すと雖ども猶足らざるの思ひをなさしむるは即ち是れ三官共樂の法を得たるものなり此の料理の妙味を解せざる者は只饜飫をこれ快とし田舎料理の如き一殺一汁總て鹹味強く調味せざれば砂糖を以て甘く加味したるものと無上の美味となして人に與へ且つ敎ゆ斯の如き者に向つて料理の要法を說くも空家で聲を嗄らすに同じ

人を見て法を説けとは是等のことをいふなり東京は帝國の大都會にして百般の事物全國の模範とならざるものなし料理の點に至つても亦然る乎近頃當地に於て有名なる或料理の先生が編纂されし料理書を繙くに未だ曾て聞さる所の奇法を載せたり斯道の老將に非ずんば焉んぞ能く世人を無視するの此の大勇あらんや之に由て考ふれば各學校に於て教授せらるゝ所の家庭料理は如何なる法を教授せらるゝ乎各地方より來る學生に向つて東京風の料理を教へらるゝ歟教師其の人の法を教へらるゝ歟は知らざれども斯の如き法は暫らく之を置き料理の規矩に從ひ鹽梅其和を得るの要を教ゆると共に三官共樂の法を教へ學生の意趣を高尚優美の境に導く樣に涵養するは是れ教師たる者の職として盡すべき義務なり夫れ地方の家庭教育は昔より自然的に相備り東京の如き幼稚なるものに非ず故に少しく注意せざれは生徒の父兄に嘲笑せらるゝことなしとも保し難きを以て余が説法を虫聲に聽過し去らず聊か反省せらるゝあらば參考の資ともならんかし

○水　貝

鮑の殼を離し食鹽にて能く洗ひ皮を去り三時間許に食鹽に漬

け置き小口より薄く切重に作り且鹽水に浸したる後ち清水に移し之を器に盛り清水を溜めて葉生姜或は花生姜抔を添へ出すべし花生姜とは花形に切りたる生姜をいふ也鹽水に浸すは清水の混濁せざるが爲めなり

鮑、石決明、九孔螺ともいふ殼の一片對なし殼に九穴あり其形ち乳房頭の狀をなして大小順次相連る殼の長きを雄とし圓きを雌とす雄は身青白く雌は赤褐色を帶ぶ殼の外面は粗糙なれども內面は緻密にして淡藍色の光輝あり研磨して螺鈿細工に用ゆ

鰒、石決明の一種なり之を常節といふ形小にして殼薄く味石決明に及はず鰒に千里光の名あるは殼裏に瑩然たる青光あるが爲めなり穴は石決明より多く其形狀石決明に酷似せるを以て甚だ紛らはし故に玆に附記す調食方は敢て石決明と異ならず

○茄子の芥子漬

芥子末一升に麴七八合混入し之を酒と醬油と等分に調合したるものにて泥狀に捏ね鹽押の小茄子を丸の儘漬け落蓋をなして輕壓を施すべし鹽押茄子大きければ適宜に切るべし

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

光瀾之觀

新井奧邃

記錄

光瀾々々、何の眼、嗚呼、以て之を觀せん。

光瀾々々、何の心乎敢て亦た之に洗はん。

光瀾々々、嗚呼、何の舟に乗じて以て之に遊ばん。

光瀾々々、抑そも何の人にして能く復た之に活きん。

人をして我を讀ましめんと欲するよりは、寧ろ彼をして自ら其中心の天書を讀ましめざらんや。

吾は則ち吾の務あり、人各々其事を事として天下治まる。

夫の傳道の若きは傳道なり、道を傳へて止む。

且つ夫れ假令ひ世に敵多しと雖も、忘るる勿れ吾は宇宙の一小生子たることを。

余や無知無能、天未だ我を亡ぼさず、我れ豈に敢て人を傷めんと欲せんや。

教育ならざるなきなり、殺伐爭鬪皆な因縁あらざるなくして此れ復た反つて因縁となる、殺伐を以て勝つ者は殺伐を以て敗らる、而して知者は古より云ふ、其敗るる者は福なりと。

吾は我が分を盡さんと欲するのみ、假し人の我を敬せざる、(若し果して之あるも)我に於て何ぞや。

先知の言に云く、今の世は濕沼穢澤の如し、既に堅陸に非ず又廣海に非ず、人間は(今のままのものは)この不潔に呼吸して其私慾に交合し、昏瞑別無きが如しと、世俗は常に徒事と僞事とに多忙にして、眞事の務めには誠に緩慢、惡むべき限り是れ惡むべき也。

夫れ人も亦類多し、三天五界にも程度限りなし、天に屬せざると同時に地にも屬せざる人有り、天に屬せざるもの必ずしも天より低からず、地に屬せざるもの必しも地民より堅確ならざるに非ず、死して死せざるもの有り、生きて既に死せるものあり、死して又死し虚無なるもの有り、未だ再死に至らずして苦悶する者あり、通常自然の理のみを以て論ずべからざる者也。

蓋し自然の自然に達して元氣の元氣に通ずるに非ずんば、以

て人たるを得ず、即ち自然以上のものを知り而して元氣以上の道と和するを得るに非ずんば、以て人たるの人とは爲るべからず、世の拘々然たる哲學の統計の如き、宗教の統計の如き、化學の統計の如き、神經腦髓の統計の類の如きを以て學となしては、必ず道に至る能はざる者也。

無我なる人は、眞理に於て、眞實に於て、健たり强たり、有我の人とは絶對たり、此れ絶對的に人格有り、其人格の貴き自我の私慾と比して言ふべからざるを謂ふ、毫髮も其個人たる點を失はざるのみならず、愈々益々個人たり、愈々益々自由たり、而して其自由は常に定命に於て完全たり、然と雖も此れは、積極的に其自我を滅沒し、其個人たる人格は一に皆な貴神の所有と爲るに及んで而る後ち始て之に至るべし、有慾自我の者と生命眞道の人とは、其遠隔するもの無限なり無窮なり。

夢あり、無錢白衣の人なり、舞踏祭の如きものありし、蓋し小旋風の一體たり、中に一人有り、白衣を衣、身高くして肉細く、亦所謂仙骨の如きもの、齡四十を出でたるに似たり、相舞ふて或は蹶つけるなん、善謔者あり、數人相應じ白衣の人を抱て空中に揚ぐ、彼れ敢て爭はず、其精神獨り悦びるが如し、又獨言せる如く而して甚だ激せず、善く己れを知る者の如し、既にして獨り立てしに、視ずや、背後は即ち川流、水は清くして廣しと强も甚だ深からず、其の横たはる木を踏んで少しく休はんと欲せるが如く見えたる瞬間、彼れ兩手を擧げて仰いで半ば水中に倒る、時に天は明かにして日は高し而して喬木有りて、些少彼我の間を蔽ふへるものの如し、多人十數步の外に在り敢て近つかず、此れ冷澹と云ふに非ず、畏れて之に遠ざかる也、唯だ猶ほ其の水に入る者或は其上身たるか將た下身たるかを疑ひ此の人の爲めに焦慮する者あるに似たり、ああ、其水に入りし所は果して上身なりし、頭顏皆な川中に在り而して水腰又脛に至る、呼吸其れ如何ん、彼れ極めて泰然、爲すあるが如くにして他人其の爲す所を見ず忽焉として微聲一發、自ら水中より起ち、獨語せるが如し、乃ち見る、彼れ神乎として白衣既に脱し、全身天然、（其如何は我れ知らず）躬ら小舟を川中に得、而して緩ならず急ならず、餘力なきが如しと雖も從容として又斷然、自ら棹して彼岸に達し、曾て或は後ろを顧みず、徐々として獨り彼れ深山

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

に路に由て登り不見に至りぬ、勞働の人の如き者群を爲して此岸に立ち茫然と此の變化を望み見て一同絶叫して云く、彼の無錢にして白衣たりし者は抑々何者ぞやと、あゝ、恐くは此れ此の種空前絶後の夢書、彼れは一の勞働上人、此岸に在て其意を得じ、あゝ、今ま彼岸に達し、山に登り更に新に其の勞働に入る、彼れ歸るの日は、必ず復た此の如くにして歸るものにはさらざるなり、錄すべきのみ。一九〇三、九、五、

人各々其責任あるべし、觀察の方面に從つて解釋に異同も生ぜん、各々自ら其天職を盡すべきなり、人の爲す所に摸倣すべからず、器械となる勿れ、人形となる勿れ、奴隷となる勿れ、無法自由をなす勿れ、無法なれば自由を失ふ、故に自由の生命は相由の道を以て成る、大人者の定命に從ひ之と相ひ由つて益々自由に至る所以なり、天に二日の相若くものなく民に二王の相若くものなく、大宇の外内二個人の眞に相若く者永遠に有らざるなり、定命なり、爭ふべからず、是れ此の實事、我が觀察とは如何ん、我が嗜好とは如何ん、此れ我が情に於て安きか、抑々噴火せんと欲するか、嫉妬我に於て之有るか無きか、抑々其れ睡眠せるか、眠り居るものは復た覺めて起つべし、此れ無我には非ざるなり、夫れ我は死なり、人々無我に至て而る後ち有神の生命に入る者也。

家の舊規の一節に云く、各生は他生の室に入て私談するを許されず、同室組合の者と雖も亦宜く此の意を體すべし。註に云く、我が時間は其短小なる者と雖も甚だ貴重たり、此れ道を學ぶの時間なればなり、己れは此の學の爲に來つて此に居り、人も亦此の道を學ぶが爲めにして此に來る、我輩は皆な徒らに合ふ者に非るなり、故に若し要用の外に於て相交り相話し其貴重の時を消費せば、啻に己れ修學の時を失ふのみならず又人の志業を妨害し彼をして其道に背くを致さしむ、如此ば二重の過罪を造るもの也、不可不謹。

其特別心得に云く、學問は自ら其身に省るを要す、道に於て疑あらば宜く自ら之を先覺に尋ぬべし。憤發は生命の機關なり故に宜く自ら與るべし。言を聽かざる者、自ら省みざる者の如きは、學問の成るべき無し、在學不要。右今記すべき大畧也、臨時の事は不可先傳と。

雜録

モツアルトの臨終

赤司嚼花

頃は一千七百九十一年の九月、殘んの暑さまだ烈しき午後、結婚して程經ざる若夫婦の睦まじく手に手を挈りて河の左岸を練り行くあり。こゝは墺太利の都ウヰンの郭外、レオポールドシヤデと云ひて、ドウ河の清き流の横はる處ぞかし。質素なる兩人が服裝、尙ほ途行く人の注意を價するものありき。

過行きざまに「今日」はと挨拶するものも多く、知らぬものらは彼等が後影をみて「いとほしの至り」やと囁きつゝ顧るもあり。「哀れ、長くはよも」など獨言つもありき。

實に男の方は、齡三十路を越すこと五六なるべく、顏色蒼白頰骨は突屹し、目凹み、歩行鈍く、呼吸せはしくして、はては妻の腕に重く其體をよせたり。咳嗽甚だしければ暫時歩行みては立止らざるを得ざりき。

夫の絕え入る許り咳嗽して苦しげなる時、妻なる婦人は靜かに脊をさすりつゝ其眼には同情の涙さへ流れ出でぬ、咳嗽の發作止む時夫は天才の光輝く眼を上げ妻の手をとり、「はしき我が妻よ、さのみ心な痛めそ、吾は早や何等の苦痛をも感ぜず」と云ひて彼女を慰めんとはするなり。

彼等は徐歩してアウガルテン公園の門に達せり、仰げば門にはヨセフ第二世の命にて「人民の 喜 の爲めに與ふ」てふ額ぞ懸れる。

妻は云へり、「見玉へ彼處の御身が愛する椅子には誰か影をも認めざるを」と。斯くて夫の瞳子をながめて「彼處こそ御身がわれを初めて打ちし處なれ」と微笑みつゝ云ひ續けたり。

「初めて打てりとな、御身を初めて打ちしは何處なりとか云ひし」と愕きて夫は問へり。實に初めて妾を打ちしは彼處なりき、惡き記憶よ、まこと御身は忘れたまひしか、御身の胸裡には音譜の外に空位あらずと見ゆ」と云ひつゝ指先もて夫の額を輕く打ち、實に記憶したまはずや、われ等は婚姻の後三週間程經てアウガルテン公園に犬をつれ來りしことありき。その時妾は云へり、犬は御身よりもわが身を愛す、若し疑ひたまはば妾を打ちて犬が御身に跳付くかを試みたまへと

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

其時戯れに妾が耳を打ちしならずや」と。いと眞面目に語り出せば、夫は笑みつゝ「さなりき〳〵恰かも其時しも皇帝過りたまひ、眞、われ怒りて御身を打てりと思したまひてし未だ婚姻後幾程もあらぬに、早々妻を打つこと、耻づべきの極みならずやとのたまへりき」。かく語り了れば其かみのこと思ひ出されて諸共に大うち笑ひしが、はては咳嗽しはじめければ、妻も笑を止めたり。

咳嗽止みし時夫は云へり「善き皇帝にてましましき、他に斯る皇帝のおはさんとも覺えず、されど人は彼の皇帝の御性質を解しまつらざりき、あはれ皇帝の御靈に安息あらせたまへ」と語りつゝ進み行けば鬱然茂りをる叢の裡にかくれたるとある椅子に達せり。妻はハンケチをカクシより取立てゝ椅子の上にうち敷きぬ、時しも一陣の涼風軟らかに綠葉を動かし、松の香吹き落せば、病者は深き息して「いとうれし」と云へり。

妻はカクシより編物を取出でゝ、自ら先に腰うちかけて「暫時休息ひたまへ、何時までなりとも御身のまゝなれば」と語りぬ。

やゝ休息ひて後、夫は妻に向ひ「コンスタンスよわれに物語を話さずや、御身の妙なる聲をきけば、われには音樂の如く響き、その時にこそ最も美妙なる靈化はあれ、やよ語らずや、昔時そこに善き娘ありきと語り出さずや」と促がせり。

妻はこゝろよく點頭て、夫の最も愛せるレッド、ライヂングフッドの物語をぞ語り初めける、彼女は、物語より寧ろ彼女の音吐こそ夫を喜ばすことを知りたれ。されば最も優美妙絶なる音聲もて語り始めつ。

物語は次第に進みてレッド、ライヂング、フッドが手づから母の墓邊に植ゑし木の下に在りし處に至れる時夫が睡に就けるをみとめぬ、されと彼を醒さむかを恐れて俄かに其物語を止めず、漸次聲を低くし終には囁嚅する如くして全然談を止めたり。

尙ほも忠實なる妻は眠れる夫の傍に座して、夫の顏にとまらんとする蠅を徐ろに拂ひのけたる時は喜色滿面に漲りぬ。

半時もすぎたる頃夫は突然目をひらきて婉然微笑せり。

「ウヲルフガング、目醒めきや、よく睡るを得たりや」と嬉しげに妻は語れり、

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

「然り、よく睡れり、われはいと樂しき夢をみたり、音樂は天國のものかと覺ゆ、あはれ愛しきコンスタンスよ、わが夢にきゝしものに比すれば曾て作りしは皆私の數にもあらず」と夫は答へき。

妻は熱心になりて「如何なる夢をかみし」と問へり。

恰かも祈禱などすらむやうに手をつかみて夫は答へき、「實に榮あるものなりき、われ死して墓に葬られ……」と云ふや、妻は驚きの涙を浮べ「あはれ愛しき夫よ、いかでかゝることの榮ありとは云ひたまふ」と、言葉を挿めり。

愛しさの情に堪へて彼が方に寄添ふ妻の腰のあたりに手を置きながら「愛する人よ、暫時待ちね、きゝ終らば榮ありと思ひたまふべし、さきに云へる如く、われ死して墓に葬られ、わが周圍には天使の一群列びて、挽歌 Aeternam dona eis Domine を誦せり、斯る聖歌は人の世にありて曾てきゝしことなく、わが曾つて作りし教會の樂などゝ是に比すべきもの一もあるなし。それより鐃と Tuba mirum ! とありき、天使ならで誰か斯る樂を作り、斯る歌を歌ふべき、實に天の聲、神々しき歌なりきと云ふとすれば其心再び夢の妙調を思ひ

出したらん如く指は自ら空に動きぬ。恰かもピアノを奏するかの如く、尙ほ涙に濕ふ眼を夫の上にそゝぎ、夫の言葉をさへぎりてコンスタンスは云へり、「ヲルフガング、そは御身が余り心を挽歌に煩はしたるが故ならむ、神こそ只そを書くことを御身に委せたまふらめ」と。音樂者はいと警誡したらん樣に、「實に、今はわが記憶に止まれり」と云ひつゝ急ぎ、譜を書付る爲にとてか、カクシの中に手を入れ鉛筆と紙とをさぐれり、されど一片の紙片も鉛筆も見出すこと能はざりき、この時しも彼の眼はウヰンナ近傍に澤なる赤チヨークに止まりき、彼は早く赤チヨークを取上げ、其先を尖らし今迄腰打懸たる椅子の上に樂譜を走書して殆んど其全面を覆はんとせり、妻は傍に在りて公園の守衛の來りもやせんと心を配り、只沈默の裡に彼を見護りてありしが、突然樹蔭の彼方より守衛は顯はれ來れり顏には高慢の色輝き侮蔑の風滿ちて近づき來り、銀して頭飾せる杖を振り上げたり、この杖と彼が服裝とは其が職權を表はす値にして彼は傲然大聲を發しぬ、「無禮者、誰が許しを得て斯くはこの椅子を穢ししぞ、何故に手を止めざる、禮知らず奴、名は何と云ふ」とされど作譜者は書

くことを止めて「待ちね暫時、實に暫時、直ちに書終ふべければ」と、妻は傍より、恐怖に震ひつゝ「あはれ守衛の君、許して彼を妨げざれ、樂譜を書きつゝあれば」と溫順なる言葉を以て宥めば、「何、樂譜を書くとな、咄法律を犯す白痴よ汝等何ものをかよくせん只椅子を穢すのみ止めよ、止めよ、」と、かくて息巻く守衛の傍に在るをも知らざる如く、小聲にて"Tuba mirum spargens sorrum"と誦しつゝ手を止めざれば、守衛は恰かも之を輕蔑と誤りてか、勵聲一番「おのれ禮無き者、名は何と呼ぶぞ」と今にも杖を打下さんする見幕いと怖ろし。妻は泣きつゝ守衛に詫びけるが、彼は再び「おのれなど其名を告ざる」と疾呼せしが、音樂者は冷然「われはカペルマイステル、モッアルト、宮廷音樂師アマドイス、ヲルフガング、モッアルトなり」と靜かに答へたり。

この答を聽ける時の公園守衛の容姿こそいと興味ありけれ、傲然として膨れたる顏に愕然たる驚きの色動くよと見えしが暫時の間に平穩なる同情厚き溫和の風となり、鬚髯多き頰邊に微笑さへ表はれ、「モッアルト」と囁き、前と全く變れるかと思ふ程の丁寧なる狀にて、『魔術の笛』を作りし彼のモッアルトと同じモッアルト氏なりや』と問ひぬ。モッアルトも思はず頰に微笑をたゝへ、滑稽と言はんより寧ろ守衛の無邪氣なる動作に感じ、手を出して守衛と握手しつゝ「わが善良なる人よ、われこその「魔術の笛」の作者なるモッアルトなれ」と答ふ、守衛は喜悅に堪へざる如き狀態にて「實に御身はモッアルト氏にてありしか、何故早く斯くは告げざりしか、わが余りに無禮なりしは今更悔ゆともせんなけれど許したまへモッアルトの君」と叫べり。「さな云ひたまひて、われは紙片無きの故に椅子を穢せり、われこそ御身が許を乞ふべけれ」と笑ひつゝモッアルトは語れり。守衛は「惡くな思ひそ、紙なきを以て椅子に書きつとのたまふか、其歌は「魔術の笛」の如くよしと思ひたまふか」、モッアルトは熱心に「いと勝れり、實に卓れたり」と云へば、「さて既に書了りたまひしか、「否、未だ了らざれど最早書くに餘地なし、暫時待ちたまへ、いざ他のものを」と突然彼は急足に少し離れたる處より、新しく塗りたる椅子を運び來りてモッアルトの前に据え「いざ書きたまへ、これにても不足ならば又他のものを命じたまへ」と

音樂者は彼に謝し、寧ろ椅子を穢さゞらんとせしが、「魔術の笛」の歎美者は挽歌の殘れる部分をかゝんことを強ひて止まず。

モツアルトは書了へ、最初より繰返して口中にうち誦じ、石像の如く眼をすゑて樂譜をみ居れる守衞に、其音樂の了れるを告ぐ、守衞は、「寫したもふとならば椅子を御家に送るべきか、はたわが家に來ることを辭したまはずばわれは喜んでこゝに椅子を守るべし。紙を取來りたまへ」と云へり。モツアルトは手もて頭腦と心胸とを指し「さのみ心に懸け玉ふな、譜は皆こゝに在り、されどわれ又こゝに來るべし、コンスタンスよわれら再び來らずや、再び來りて御身に會すべし、さて御身の姓名は」と訊られて守衞は「ゲツベルト」と答へき。

「ゲツベルトの君われ御身が親切の濃なるを謝す、今書し椅子の上にある樂譜整へられん日は御身に告げまゐらせむ。われは君の來訪を喜んで迎ふべし、わが住む處はラウヘスタイン、ストラツセ九百三十四番なり、われは御身の爲に樂を奏すべし、こゝに書けるは死者のために歌ふ挽歌なり。

「多謝す、ヘル、フオン、モツアルト、御身を訪ふ日を今より喜んで待つべし、そのをりは「魔術の笛」を奏してんや。

「諾し何にてもあれ、御好みに任すべし」とモツアルトは笑みつゝぞ答へける。

音樂者は妻を挈りて家路に向へり。

事のありし日より二ケ月の長き間を經過せり、ゲツベルトは日として休むことなく「魔術の笛」の作者と會せし椅子の在所に歩を運び、未だ消え殘れる樂譜をながめては其傍に座し、人待顔に時々公園の入口の彼方を眺むるを例とせり、はては「われは欺かれたるか、よくもわれを詐れり、輕信せしはわれの愚なりき」など獨語しつゝ怒りては家路に還り、心に未練を殘して翌日も亦モツアルトが椅子の傍に立てり。「今日は必ず來るべしと。斯くの如くして又數週日は過ぎたり。黄紅の木葉秋風に吹拂はれ、枯木寒鳥をやどし、皚々たる白雪散りつもりて公園の道も知られざる程なるに猶ほゲツベルトはモツアルトの來るを待たんとて日々に通へるなり、實に彼が散歩は第二の習慣となりていかにしても制止すること能はざるなり。

十二月の三日午後例の椅子に腰打かけてモツアルトを待てる

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

をりしも僧服を纏ひたる姿の公園の入口より深き雪を踏みて來るものあり、彼がゲッペルトに近き帽子を脱しければ守衛は靜かに立上れり。新來の旅人は、額の汗をぬぐひつゝ「斯る日に人を探るは容易の事にあらず、君よ、守衛ゲッペルト氏の住居を知らずや」と問ひぬ、「われこそゲッペルトなれ、御用は如何に」と答へたり、僧侶は「幸福よし、われはスタッドレルと申す僧なるが、カペルマイステル、モッアルトわれを遣はして」と云ひ終らざるにゲッペルトは「然らば彼は眞にヘル、フォン、モッアルトにてありしか、われは誰か僞をもて欺きしにあらずやと疑ひき、實に嬉し、君よモッアルトの君は如何にかしたまふや」と問へば、僧侶の顏は悲愁の曇り「さればなり、彼こそ病、いとも重き病に臥せりけれ、最早絶筆の樂譜も完了すること能はじ、彼はこの公園にて初めて御身の助をかりて其大作を書初め、病あつきにも關らず明日午後二時には大成すと云へばわれら一度樂譜を調ぶべし彼は御身に約せしことを自ら告ぐること叶はで、明日午後彼の枕頭に來りたまはんことをわれをして御身に傳へしむるなり」感激したらん如き顏色にてゲッペルトは「實に彼は予を忘れてありきとや、雪ふれりとも三時間も走らば彼處にはつくべし、明日までのいと待遠きことよ」と「いざ別を告けんゲッペルト君、時を違へたまふな、彼の番地はラスヘスタインストラッセ…………」「九百三十四番、いかで番地を忘るべきモッアルトは自ら告げたまひき、さらば二時には彼處にあるべし。

翌日即ち十二月五日の午後二時モッアルトの臥床せる病室の戸は靜かに開かれ、モッアルト夫人に導びかれてゲッペルトは爪先にて穩やかに歩み來れり、彼は病床に横はる音樂者の容貌の變じたるを見ては、殆んど泣咽することを禁ずる能はず、確かに其顏には死相顯はれたり、モッアルトは守衛の顏を見て微笑せんとしたりしが、寧ろ苦痛のために顏を彼方にそむけ、只手を差し出して「われ約を守れり、いざゲッペルト君座したまへ、われは直に初むべし」と云へり。

ゲッペルトは音樂者の手をとりて其唇に壓つけ、情せまりて一語をも出すこと能はず、幸にもこの時再び戸は開かれ數人のもの入り來りければ、やをら隅に退き其處の椅子に腰うちかけたり。入來りしものは、作譜家スタッドレル僧正、モッ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

アルトの弟子にて彼の朋友なるススマイエル、次中音を歌ふシヤック、ヴイオリン家ホフエル、モツアルトの義兄弟にて低音を歌ふゲルなり、孰れも悲愁の顏色ならざるはなし。

彼等はモツアルトに會釋しつゝ、ススマイエルは彈琴の前にうちかけたり、スタツドレルは指揮者として指揮杖を動かし平常の如くにシヤックはユアを歌ひ、ホーフエルはテノルをゲルはスバを、殆んど信ずべからざるが如くなれどもモツアルトは至高音を歌へり。

嚴肅なる調音、悲むが如く、咽ぶが如く慰むるが如く、モツアルトが天使の歌ひしを夢にきゝし挽歌、死者の永遠の安眠のための祈禱をなし、來らんとする天の裁判の所に至れる時歌ふものゝ心は最も強し激昻し、彼等の心胸の奥底より歌ひ祈れり、Et lux perpetua luceat eis

而して壯嚴なる Dis irae つゞき、世界の破滅と裁判の戰慄恐怖は主なるキリストの來臨まで續くことをいとも壯重に記し、歌ふものゝ叫びは萬有の生物を神の御座の前に呼出せり

この時しも指揮杖は深く威に打たれたる僧正の手より墮ち、彼は其腕を死に垂んとする音樂者の上に投げ、聲を啜りて泣けり。皆人の手より譜は墮たり、歌ふものは沈默して其手は祈禱のために拱けり、モツアルトも亦其作に感激せられ、譜は手を離れ、顏は枕に埋れたりき。

公園の守衞は膝つきて「彼の言ひしは正しかりき、實に「魔笛」の曲に勝れり」と云ふも嗚咽の聲となり、モツアルトに告別することをも忘れて外にすべり出たり。

其翌日大なる音樂者は既にこの世の人にはあらざりき。

十二月六日彼の遺骸はセント、マルクスの墓場に運ばる、この日は烈風大雪、彼の墓に伴ふ生前の知己も多からず、行きしものも早くヴ井ンに歸れり。

唯一人、墓丁の墓を埋むるを待ちて、盛上げたる土の上にかかみつゝ、震ひ聲にて "Requiem aeternam dona eis, Domine!" と祈れるものあり、雪の背上にふり來りて高くつもるをも知らで一時間も祈れり、終りて墓上に花冠を置き靜かに憂に沈みて家路に就けり。

これぞ公園の守衞ゲツペルトなりける。

楓葉蒼々多出恨
寒山半出白雲層

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

水かゞみ

左琴女

紅さいた口も忘れて清水哉とは、彼の俳諧に名の高き千代女の句なるが、夏は素より云ふ迄も無けれど、春にも秋にも、茫々とした野徑をたどる折ふし、又は崎嶇たる坂路をのぼり行くをり、思ひも懸けず雜草の中に亦思ひも懸けず松の木蔭に、サラ／＼清水の湧出で浮々たるありさま見つからば、紅はものかは小半時かゝりて作り上たる白粉の顏をさへ、ひた洗ひに洗れぬべし、我家の前に岸あり、岸の下に清水あり、清水の末は廣き淺き堀川にして、其水面には、芹菰藻のいろ／＼が美敷綴どりて、逝く水の影とては處々に尠つゝ見ゆるのみにして唯四時折々の水草の變化を見るのみ、然れど水草の變化は實に大人びてあれど、大人びずして面白きは此水草の上に、立替り入り替りして訪音づるゝ、御客樣方の有樣なり、此頃も蜻蛉の叔父さんまだ居殘りて、何の御用か知らねども、子細らしき顏付して彼方此方へ飛廻り居るなり其飛廻り居る時代こそ宜けれ、若もすれば圖らず兒童の手にかゝり死活の權利を握られて、四苦八苦、遁れ出んの身構こそ由々しけれ、斯の如き活劇が、屢々清水の邊にて演ぜらるゝ事なれば、其面白さ忘れかねて、紅白粉の沙汰はともあれ、我は朝夕この清水へ遊びに來るなり。

或る朝早く、婢女がはこぶ一杯の水よりはと、例の清水へ立出たるに、蜻蛉の叔父さんは未だ御目ざめなき樣子なれど、三五ばかりのハキリとした孃樣の、御聲に似たる、鈴虫の初音、我耳には少々過分の心地はすれど、亦不足の事の有し時のうめ合せにせんと是を聞つゝ、清水近くなりたる時、我より前に人あるかバサ／＼と洗濯にてもするらしき音の聞ゆ、奈何なる人かと窺ひ見れば、六十は過たらんと思はるゝ老婆解衣堆高く邊に置きて其の一枚を洗ひ居たり、次手惡しゝと差ひかへて、我は岸の上に蹲り見るとはなしに老婆の方を詠やれば、老婆の方は斯樣に意地惡きものゝ上より視てあらんとは心付ず、唯一心に洗濯しゐるなり、暫くして洗濯も濟たる樣子なれば、早々立歸る事ならんと思ひきや、老婆は腰より手拭を取はずし、靜に顏をあらひ初たるが、丁寧に丁寧にして終に洗ひ上たり、最早早々立歸る事と思ひきや、此度は懐より小さき櫛を取出し、水の面に頭をうつし顏をうつし

兎み斯みしつゝ其櫛にて髮をとき、水をつけ、水を塗けては髮をとき、此日此時此老婆の全身の力は、僅に殘る髮の上にそゝがるゝよと見らるゝばかりの熱心にて、其水鏡にうつして只管髮と顏との配合を氣遣ふ樣なり、實に雀百までの諺通り、何歲になりても女心はかうした者かと、我只呆れに呆れ居たる折ふし、ふと上たる其顏は、誰やらに似た誰やらにヱ、誰やらてあつたにと、頻りに考へたる末、思ひ出したるは、彼の大坂の博覽會の美術舘にて、誰の作なりしか五寸程の木の彫刻にて、里の婆さんが砧うちて居る樣が作られて有たるが、今此老婆の顏と似たとは愚生うつしなり、扨其時の老婆の價は三百圓とありしが、其後誰の所有になりしか知らねど、今この婆さんは、身のたけ五寸てはなく四尺何寸かもあり、亦美術舘の婆さんの如く砧ばかり打てはなく、餘の藝はしらず現に洗濯は之程上手なり髮も中々上手にて、木の彫刻の婆さんが三百圓なら、是は確に三萬圓の價は有べきに、扨此婆さん賣らんと云へば、三百圓所でなく唯の三圓にも買ふ人なかるべし、誠に人間の好奇心ばかり因緣なき者は有らじかしと、思ひながら我も一種の好奇心にかられて、外事なく婆さんに見とれてありしが、老婆は終に我事をはんぬと云ふた樣な顏守して、いつしか家に歸へり去りしが、扨も女と申ものは彼れ迄年とりても未だ懷に櫛を入れ、人しれぬ水鏡にうき身をやつす者なるか、抑之は誰に見せよの心情だてか、誠に不思議のありさまかなと、疑三分に面白さ七分にて考へゐたるが、此解釋は難なくつきぬ」昔し〳〵婆さんは川へ洗濯に」定めし爺さんは家に待らら。

手紙のうつし

八王寺に某と云ふ隱士あり。近頃ろ寄せられたる一書の余りに面白ければ、左にかゝぐ

近ころ御ようす如何に候哉過日宵柳子御入來御もてなしも不仕御高容被下度候その折シエクスピーアについて及びto be云々の BE字について所見三段有之候もの申上置候はつに御座候御きゝ被遊候や御評判被下たくれかひ上候又坪内と森と二文學者を題としての一句

あさかほのともつな手くる文五兵衛

ならひに左の一文につき御高見御漁たまはりたく千秋のおもひこのことに御座候

古人兩三集　日始隨芳草　去復追落花　歸鳳鶴翅寒　不狂猿古峯

長沙無限意

乃云　明治女學校の女子を放逐して男兒ばかりと爲し人間を御釀造相なり候はゞ尤株名は前の通にて可然候されば小子上京合併孫子の講義及第十四編十五編十六編の三章孫子の惜て世に流布せしめざりしもの相傳可仕候

吉川元春　在馬野山　馬野山者　左右湖山　纔通一橋
人々震怖　元春命酒　囑諸將曰　含天大雪　園爐酌酒
部陣興味　諸君勿哂　玉杯佳肴　湖上風雪　声荻亂舞
人馬蕭殺　依擧大枚　二人從之　元長領令　巡視諸陣
羽柴秀吉　提兵瞰下　隱見林樹　豪氣衝天　顧左右曰
在小早川　汝望見之　南條之轍　探腰出瓢　片桐助作
出旗單笥　依命點茶　大盌未盡　菓子已空　殘饗未消
主客洪然　諸將洪然　篝火愈明　風雪未歇　時遂天明
如芳艸生　於寒木下　又似古壑　享受落花　如儱金鎖
伴實人　又似人生　行路遼遠　途無起伏　道在增損
誰向長沙　論雌雄者　玄靈無月　野水浮珠　誰是癡人
誰夫投之　贊云有將　兵刃相交　天下風雪　未及我庵

天地有情なる小册子を買者あり其始は星と花と云ふ一章あり其末節を見よ白露の一滴を白菊の一しづくと改ては如何に候へく哉

三四日御とう留相なり候はゞ短刀鍊成仕り候へく秋夜の意武藏野の西端に鋼鎚のれのさへたるをきかすや借問一天星斗何等故あつて落鉗裏

小子うらに桶屋あり男兒二人長を主(しん門の辰五郎とはまゐりませぬか)と云を長と申候ところ御祭禮のまんどう成りて何かしたいめくれよと言はれ

　人如燈兮燈如子……宗門無盡燈論の内
　分身不怠何需供……よばれてでん四章

金燈橋上美人庄……西遊記犀牛の祭 鹽官扇子の古話
獨挺身馳望其中……いんさいろ〳〵行業三年純一
空陣誰哂西東子……水滸傳桑明の條又潭風大過
一世英豪壇前供……御祭の人形〳〵
靈巾依舊日月長……寒山
散漫淸香七國中……ソンヒンの故事

妙趣云和煙搭在玉欄干
又勿笑秋深月孫燈獨照矣
何故法身三世又二世窮竟不洩水天大有同々
又不能休去曰　有人才兼文武出則將入則相如何辭非其年又還無言哉威力空斃死
歷世輪轉之間悲矣哉孤城寡兵天涯風寒
　叱云我有救之手段兩種須臾云選

このころ新體詩と申候もの流行いたし候よしあんなものはだれにでも出來るとあさけり候ところかたはら人ありてさらばやつて見よて吉野山と云ふ題を與候七重八重色香あらそふ綾の糸は地織物を出す故にやあらん秋の夜ながごときこきて御覽ずるも亦一興にや

　わかたらちれの故郷に　ごとをとひつゝ打笑て
　花とし云へはみよし野の　嶺の白雲ふみわきて
　人にし人のあと見れは　末はいつしか白波の
　よせては返す砂の上　紅塵五丈の都路に
　遊糸さそ小振袖の　有き皆むす塚の上
　冬にさくらはさゝれとも　春なほさむき雪の空
　きへぬ恨の漁火は　月影きよき海上に

三すじ四筋のくもの糸　一すじならぬ眞心は
誰か千載に生れきて　松魚のをとを岸のへに
あきつしまれを墓として　やかていろれのいますてふ
遠くはかきりなよ竹の　光にほろゝ青の葉を
すてゝ行向は白眞ら　放つや征矢を今更に
もとめはなとか興さろ　人の心のやとりれは
いせのさく子のはつたより　をほろにかすむ霜とのを
なかれて出る里神樂　の六趣の巻にふまれつゝ
みれのいはほにさらされて　三千とせ近くあとやさき
ちりてはのころさむしろに　五風十雨の秋の色
姉君よ吉野の山に菊を植て　今年の秋を忍ばなん

時事

○支那人の喧嘩

曾て支那人の相爭するを觀る。喧嘩とは眞に字義を得たり、何んぞ其かしましきや。彼、素早く辮髮を鉢巻にし、袖をかゝげ腕を扼するうちにも、口怒聲罵聲を絕たず、虛空に拳を掲げ、身を躍らせ、足を揚げて連りに蹴る。而も其の敵と相距る一二間以上にして、毫も前進せざる也。

昔しかゝる喧嘩に一笑せし我も、近來は少こしく此方の事となりゆくを覺えたり。

○大學大學

大學は德に入るの門、器を造るの職業學校に非るを言ふ也。故に其の學科の高尙なるを希望するの理由、思想品格の高尙ならんとを希望するの主旨なり。世上今や連りに大學の創設あり、其名ます〳〵陳腐ならんとす。昔しは、學士ありて博士なかりしが、博士多きに至つて人更に大博士を珍とするに及べり。大學大學、更に大々學を要するの聲亦た遠からずして起り來らんとする也。

○相撲何故に人氣ある

相撲は何故に人望ある乎。近き五六年の大景氣は、新聞紙の鼓吹を以て最大動機と爲せども、新聞紙が斯の如く廣紙面を塞ぐとを辭せざるは、もと人氣ある故ならずや。相撲、何故に人氣ある。其の倮躰にして勇壯なる、其の力を角して勝負する、就中、勝負によつて直ちに地位顚倒し、決して新進力

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

士の猛進を障礙するものあらざるに由る。今や各方面に老朽者充塞せり。ひとり相撲道に於て少壯鋭氣の煥發するを見る天下目を聳だて、快なりとする宜べならずや。

○常陸山

渠は角力道の團洲、回向院の團朝と云ふべし。渠ありて新日本の相撲一變せり。渠は武人の子、撃劍家の總領なり、決然として土俵に立てり、豈に抱負せる所なからんや。汝が氣合汝が掛引、泥の子の及ばざるも亦た可なり。好漢彌よ惜しみて、彌よ猛立せよ。

○外國傳道會社

「新人」第拾號に、某牧師の談話として外國傳道會社の實況を語られたるもの掲載せらる。此事緊要の觀察なるに、別して論議するもの多からざりしが、今ま牧師其人の口よりして之を聞くは、甚はだ愉快なり。蓋し云く、外國傳道會社が外國に傳道せんとて宣教師を派遣する時には、必らず之に不文又は明文の憲法あり、即はち其國の宣教者を使役するには對等の權利を許さず、惣べて本國宣教師の下に監使すると云ふ是れ也。然るに此の決定あるをも知らず、外國傳道會社が日本の宣教者を重用せざるを慷慨し、中には傳道資金のみを送らば可也、又は日本人を任用する方反つて効能多しなどと忠告するものあれども、皆な是れ外國傳道會社の性質を知らざるもの也。凡そ外國傳道會社が外國に、例へば日本に傳道者を送らんとする時には、是非とも其國を暗黑なりとして派遣するものなれば、其國民を重視することなし。其國民の役者を同等に扱かひ、之に同格の權利を附與することなどのあらん筈なし。故に凡そ外國傳道會社に附屬する日本人役者は、會社の憲法として、外國人に附屬し、たゞ其下に順從して勞働するの外あらざるもの也とぞ。

○其の雇はれ人

外國傳道會社本來の意志既に斯の如し、之をしも忍ぶべきや否やと問ふものあらば、吾人は對へんとす、之れ一向に構ひなきと也。人、我を重視せざるとて、之に不平を言ふべき餘暇はあるまじ。實際、宣教師諸君よりも尚ほ劣等なる人物

は我國に多くあるヿゆゑ、其邊の人物に對して傳道を乞ひ、之が改善を委賴するも亦た便利ならん。又、傳道會社の性質は斯るものと承知して、之に使役せらるゝ日本人如何に多くとも、夫を氣にして慷慨するなどは、昔しの事也、今日は互ひに外國人を使役して仕事に勉强するの外あるべからず。我國民の事業に外國人を使ふヿもあれば、彼の國人も亦た日本人を雇役して可也。たゞ雇使せらるゝ時は、雇はれ人たるヿを好く覺悟して其主に從順するヿ當然の道也。此時に方りては從順するが即はち偉大にして、生意氣を言ふが小なるヿ也然るに此義を忘却して。兎角に反抗し、以て大和魂しひなどゝ思ふ族の尚ほ滅ぜざるは、小國民の局量と云ふべし。

○獨立は如何

但だ夫れ、傳道界第一流の士人が、何日迄も外國傳道會社雇使の下に辛棒するは、不經濟と云ふべし。かゝる士人は速やかに獨立し、外國傳道會社に對立する權利を以て、同等同格の日本傳道會社を創立せられんことこそ望ましけれ。眞との交際は、對等にして初めて行はるべし、眞との提携も亦、同格にして初めて行はるべし。既に其の下に屬して而して怨聲を放ち、既に其社に雇はれて而して獨立を希望する如きは寧ろ帝國の恥辱と云はん。

○東洋婦人會

東洋婦人の交誼を敦うし、東洋來留學の男女生を厚遇せんヿを旨とせる東洋婦人會なるもの創立せらる。極めて時宜に適切せる發起と云ふべし。試ろみに、海外に留學せし我朝の人士に就て問へ、公は海外に於て如何なる感化を尤とも多く感謝する乎と。單に其の學校生涯のみに限られざりしヿを知るならん。翻がへして思ふべし、斯の婦人會の如きもの、遂に國際外交に影響を及ぼすヿの不思議にも甚大なるヿを。吾人は其の淸健なる發達を希望す。

社告二則

一　編者數週旅行致し去月廿五日分は休刊せり。
二　黑岩君の演說丈は次號に於て完結せしむべし。

女子之友

第百四拾四號（九月二十日發行）（一册七錢 郵税共拾錢 六册五拾錢 十二册一圓拾六錢）

赤帝旛を回して爽涼の氣都門に滿ち新雁既に來りて燈火親しむべきの頃となれり女學生諸子は戀しき父母の膝下を離れて再び學校の生活に入り夫人孃子達は山村水廓の客地より歸りて家庭の生活に復しぬこの好時期に際し本誌は百四十二號以下改良に改良を加へ文學に流れず實用に偏せず高潔なる趣味の中和を捕へ益々以つて學校家庭の好侶伴たる事を期せんとす希くは續々愛讀の榮を賜はらん事を

口繪＝常盤公園●櫻山●琉球那覇港●京都音樂講習會

目次

◎女子之の友

●社說……主筆田部井鉚太郎
●圖案に就て……帝國圖案社主福地天香
●舅姑に對する心得……文學士村上辰午郎
●女子敎育の研究……香川縣視學岡田辰次郎
●女子と民法……在法科大學山本素山
●經縣談……東京看護婦會長大關和子
●蚊々錄……勁林園主人
●女風漫錄……天涯居士

◎學藝

●英詩評釋……文學士小日向是因
●萬葉集註解……村尾節三
●住吉物語講義……上地信義
●蜘蛛の本能……鳥取縣立米子中學校敎諭阿部良平
●圖書に就きて……東京高等師範學校訓導柿山蕃雄
●開麥（はながたま）……下田春興
●俳諧糸ぐち……素文堂蔦秀
●箏の話……蘆の舍回琴

●編物……共立女子職業學校講師豐原しげを
●組紐……豐原しげを
●挿花……恪齋居士
●詩人某に送る……山本細柳

◎小說

●女ごころ……文學士內海月杖
●輿論一班……女子の友記者
●雜錄……仝記者

◎誌友文壇

●兼題新躰詩
仝和歌
仝今樣
仝美文
仝短文……文學士尾上柴舟選評
●兼題外韻文
●端書通信……記者撰
●社告數件

新刊廣告

明治才媛文集

第五集 十月中旬新刊

第一集七版 第二集五版 第三集四版 第四集二版

各集 金廿五錢 郵税四錢

●發行所 東京市神田區鎌倉町三番地 東洋社 ●大賣捌 東京堂 北隆館 東海堂

（明治卅六年十月十日發行）（毎月二回十日廿五日）

市川團十郎の石橋（しやくけう）

〔獅子（ライオン）〕

ライオン齒磨

花にたはぶれ、枝に伏しまろび、げにも上なき獅子王のいきほひ、なびかぬ草木もなき時なれや。萬歳千秋と舞ひをさめ、萬歳千秋と舞ひをさめ　獅子（ライオン）の座にこそなほりけれ。

ライオン齒磨

（明治三十六年六月十七日第三種郵便物認可）

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY